

インド石窟の旅

インド・スリランカ・パキスタンを旅行しており、インドの仏教美術の黄金時代を象徴するアジャンタとエローラの洞窟を見に行く機会がありました。

マドラスからボンベイ経由で、両洞窟を見る拠点となるオランガバードに飛ぶ予定でしたが、ボンベイに着いて見るとオランガバード行きはキャンセルになり、その日はフライトが無いとのことでした。同じ方面に行くほかのインド人旅客と一緒にタクシーと交渉しましたが、

ニューヨーク州立大学

伊藤 宣博
伊藤 宣博

空港にいるタクシーはどれも古い車でとても長距離、特に夜の旅には耐えられそうにありません。それでは汽車で行こうということになり、タクシーに乗ってボンベイ駅に行きました。何しろものすごい人混みでどここの窓口も長い行列です。やっと女の人専用窓口があることが分かり、幸いそこは列が短かったのでそこに並びました。しかし残念ながら席は全部売り切れで今晩は乗れません。インドの人口の多さに今更ながら感心して次の策を考えました。残る手段

は長距離バスだけなのでそれに乗ることになりましたが、バス乗り場がどこなのかさっぱり情報がありません。幸い空港で一緒だったインド人が情報を集めてくれて、またタクシーに乗ってボンベイの町を一時間程走りました。予定になかったボンベイの町の観光もタクシーの中からとはいえ、する機会を得たわけです。やっとバス乗り場に着き、幸いエアコンのバスに席が三つ残っており、一時間後に出るというので待つことになりました。夜九時発、十一時間後にオランダバードに着きます。真夏の旅でしたので日中は四十度を越える日も少なくなく、夜になってもニューヨークの北国に住んでいる我々にはかなり蒸し暑い一時間でした。沢山バスが到着するのですがどれも満員で、我々のバスではなく、かなりのオンボロバスが多いので覚悟しておりました。やっと九時過ぎに我々のバスが着き、やはりほとんど満員なのですが、三席

空いており乗り込みました。外の空気に比べて非常に涼しくこれならば楽に十一時間過ごせるだろうとほっとしました。それでも中はごった返して我々も足の下に荷物を置きその上に足を置いて身動きできないような状態で出発しました。クーラーのきき過ぎと身動きできないこととあまり良く眠れない夜でしたが、それでも十一時間後には無事にオランダバードに着きました。幸い予約のあったホテルの五十メートル先でバスが止まったので早速ホテルにチェックインし、朝早かったので地元の旅行社と交渉してエローラとアジャンタの洞窟へ行く車を手配してもらい、その日はホテルでゆっくり休むことにしました。

アジャンタの石窟

アジャンタはオランダバードから一〇〇キロ以上もあるので朝早く手配してもらった車で出

掛けました。アジャンタの洞窟は紀元前二世紀から造られ始め七世紀頃には最後の洞窟が掘られたようです。アジャンタで洞窟が掘られ始めた頃はモリヤス帝国のアショカ王が仏教を国教と定めてから百年以上もたっており、仏教は初めの勢いを無くし始めてブラーミニズムが勢力を伸ばしている頃でした。それでもインドの北西部では仏教を保護する貴族たちがまだ沢山おり、その人達が資金を出して始められました。

アジャンタ洞窟寺院建造は紀元前二世紀から紀元後二世紀までの第一期と五世紀から七世紀頃の最盛期となった第二期に分けられますが、第二期はグプタス帝国が栄えた時期で王族達はヒンズー教でしたが仏教にも厚い保護を与え、アジャンタで新しいすばらしい洞窟が掘られて行きました。その後どういわけかここアジャンタは忘れられ、エローラの方へ洞窟掘りのエネルギーが移動して行きました。アジャンタの

アジャンタ石窟 外観



洞窟は長い間忘れられておりましたが、一八一九年にイギリス軍の将校達が猪狩りに出掛けた時にたまたま見つけ、かなり荒れていましたが、それでも二千年もたっている壁画の見事さは正に印象深いものだったようです。ここは人里から離れていたために保存に役立ったのでしよう。

紀元前二世紀から十世紀頃までアジャンタやエローラに見られるような岩を掘り除けて建物を造る建築がインドで見られました。このやり方は一度掘ったらもう取り替えることができないので絶対に間違いができない方法です。

まず最初に岩の表面に下書きが書かれます。それから掘る人達が入り上から下へと、天井が最初に完成するように掘っていきます。そしてその後絵書き、彫刻家、仕上げ人等が入り、部分部分を石が取り除けられる度に完成して行きます。床は上から溝を掘り始め、それから横に

アジャンタ石窟 菩提樹葉モチーフの窓



柱となる場所をさけて掘り進んでいきます。これらの工事が全て電気工具は勿論のこと大きな工具なしに手道具で行なわれたわけですから当時の人々の忍耐力、信念、信仰心に感嘆します。

この洞窟は全部で二九ありますが、ものすごい峡谷にあり、昔は各洞窟から階段でワゴレ河に降りられ、そこから生活に必要な水運び上げていたようです。今はその階段は全て無くなっていますが、洞窟の前には観光客のために立派なコンクリートの歩道が造られています。

このアジャンタ洞窟のまず初めの驚きはこれが完全に人里から離れた深い峡谷の中にあり、人間の苦しみを考え、どうすれば救われるかをめい想するには理想的な場所であることです。ここに住んだ僧達は水をこの河から運び上げ、日用品は近くの村から手に入れました。知的な刺激はこのアジャンタが中国とかアラビア海からの貿易ルートに近かったために商人や旅行者

達が立ち寄り、僧達の知恵を借りると同時に、外からの情報を残して行ったようです。この場所はめい想のためには十分人里から離れておりますが、そうかといって世間から孤立しているわけではありませんでした。

洞窟は河の流れに沿って馬蹄型に並んでいて両端が新しいものでまん中に古いものがあります。二九の洞窟の内、いわゆる礼拝をした寺院は五つで残りは僧達が生活をした僧院です。

礼拝堂は大きい長方形の部屋で何本もの柱で本堂と三方の廊下が区切られております。そして入り口の反対側の一番奥には聖所があります。聖所には半円形の通路に囲まれて祈願のための像があります。入り口は菩提樹の葉のモチーフでできた大きな窓のある独特の正面となっています。この窓は年代が進むに連れて大きく、しかも手のこんだ物になっていきます。

アジャンタの工芸師達はここの全ての洞窟に

木造の建物の感じを出そうと努めたようです。

高いアーチ型の天井は木の梁があるように見せかけてあります。実際、かなり頻繁に本物の木の梁が石の天井の中に取り付けてあります。同様に柱や窓のデザイン、入り口も木や竹で造られてるように見せかけられています。

僧院の方の造りは、やはり長方形の部屋でその両側に小さな個室がいくつもついています。入り口の反対側の奥には仏像又はストゥーパがあります。僧達はここに住み、生活し、それぞれの個室で睡眠を取ったようです。個室にはベッドとして使われたらしい石の台があり、中心の部屋とは木戸で仕切られています。

ここは壁画が非常に有名ですが、再発見された後イギリスによって補修されましたが、それがかえって悪くかなり痛めてしまいました。その後一九二〇年に二人のイタリーの専門家が修復にあたり、それ以来良い状態で保存されてい

ます。

馬蹄型の中心部にある古い洞窟は仏教が小乗と大乘に分かれる前の小乗時代のもので、実際の人間像を表わしたり偉大な教師自身を描くことは禁じられておりましたので、そのかわりに幾何学的な模様とかストゥーパが用いられております。その頃の洞窟と思われる第十番の洞窟の入り口には仏像彫刻がありますが、これは大乘仏教が出て来た頃に追加された物であろうといわれています。

壁画を書くためには下地作りに細かい注意と時間のかかる準備がされています。まず、土、砂、野菜の繊維、わら、草が混ぜられて壁に塗られます。次に土と岩の粉が塗りこまれ乾かします。固める物は多分糊であったろうと考えられています。最後に薄く石灰が塗られて下地はできあがりです。その上に輪郭が辰砂の赤で書かれ下絵が塗られます。そして最後に仕上げ



アジャンタ石窟 彫刻と壁画

の色が塗られ、そのあと磨きがかけられています。初めの頃の壁画にはあまり色の良く保存されてない物もありますが、これが二千年以上もたっていることを考えるとその鮮やかな色彩には驚かされます。

アジャンタの壁画は勿論仏教をテーマにした物ですが仏様が王子の頃の宮殿の様子とか、沢山の王子や王女達の雅やかな生活、市場の様子、音楽家、毛皮の帽子をつけた外国からの高官、其の他戦争用の馬や猿、孔雀、象等沢山の動物も出て来ます。この洞窟が造られた千年の間の生活様式を垣間見ることが出来るわけです。

ここが一番栄えた時期には何百人もの僧が住み、祈り、生と死について考える生活をしていました。

エローラの石窟

エローラはオランガバードから三〇キロのと

ころにあり、洞窟は南北に二キロ続いて三四窟あります。ここが栄えたのは七世紀から十一世紀頃までです。ここはアジャンタと異なり、仏教窟、ヒンズー窟それにジェーン宗教の洞窟と三種類が並んでいます。ジェーンはヒンズーから生まれた宗教ですが、仏教とも似たところがあり、ヒンズー教の基となっているカースト制度を否定する宗教です。仏教窟が一番古く、そのうちにヒンズー窟ができ、それからジェーン窟が造られました。十二の仏教窟、十七のヒンズー窟、そして五つのジェーン窟があります。アジャンタは壁画で有名ですが、ここは彫刻で有名です。

ここはアジャンタが急な溪谷の傾斜地にあつたのに対し、なだらかな丘に造られています。仏教時代のものには仏教かインドでは下火になってきた頃のもので、割合に質素な感じのものが多いの比べ、六世紀から九世紀に彫られたヒ

ンズー教の洞窟は非常に手がこんでいます。仏教時代の業績を建築様式、彫刻ともにより手のこんだ複雑なものを造って追い越そうとしたようにかんじられます。

特にヒンズー教のカイラサ寺院は有名です。

奥行き五〇メートル余り、間口三三メートル、高さ三〇メートルもある大きなもので、二十万トン以上の岩がこの寺院を造るのに掘り出されたと推定されています。ものすごい見事な彫刻が建物全体に施されています。

この巨大な寺院も上から下へと掘り下げられていったので、足場を組む必要がありませんでした。この工法は絶対にやり直しがきかないかわりに、途方もない巨大な足場を組む必要がない利点もあつたわけです。

カイラサはシバのヒマラヤの故郷を表わし、この巨大な寺院はヒマラヤの山々を象徴しているそうです。

一つの岩からくり貫かれたとは信じられないような複雑な建物です。ギリシャのパンテオンの二倍の広さ、一倍半の高さがあり、これを一つの岩から手道具だけで仕上げたとは本当に驚嘆します。多分世界で一番大きな一つの岩から掘り起こされた建造物であろうと言われています。七千人の労働者がシフトを組んで絶えず働いて百五十年かかったと信じられています。

ジェーンの洞窟はエローラの最後の段階、十世紀前後に造られました。五つあるジェーン窟の中で一番大きな寺院はヒンズーのカイラサ寺院に似ており、寺院の中にはこの宗教を興したマハヴィラの坐像があります。

ジェーンという宗教は仏教と同じ頃にインドでヒンズー教に反対して始まった宗教です。創始者マハヴィラはビハラの王子で、紀元前六世紀にヒンズー教のブラーマン「僧侶」制度を改革しようとして興した宗教です。カースト制度

を否定して僧侶階層が精神的に優れているという主張に反対して起こりました。仏教もジェーンも運命、輪廻、再生から逃れることが望ましいこと等のヒンズー教の基本的教えを受け入れていますが、僧侶階層による絶対的の一元論を否定しています。

仏教は救われるための手段としての極端な禁欲主義を否定しますが、ジェーンは極度の自己禁欲を勧めます。マハヴィラの教えによると嚴格に心と欲をコントロールすることによって救われると説いています。

ジェーン信仰者は現在三百二十万人、主にインドの南部と西南部にいます。彼等は生まれ変わることに従ってジェーンの聖人達の歩んだ道に従うことによって精神的な救済が得られると信じています。救われるためにはあらゆる殺生をしないことを信じております。このためにジェーンの人達は菜食主義ですし、職業も限られ

ます。例えば銀行とか、商業、及び専門職です。ジェーンの犯罪人はいらないとも言われますし、社会的には非常に尊敬されておりますが、皮肉にも厳しい禁欲主義を唱えるジェーンがけて経済的に裕福になる職業につくこと、特に金貸し等のために人気がない地域もあります。

二つのインド

一説によるとジェーン教も仏教もヒンズー教から分れた宗教とも言われています。国民の大多数がヒンズー教徒でその他に頭にターバンを巻いたシーク教徒、回教徒やクリスチャンも少数おりますが仏教徒はほとんどおらず、インド社会に於るアジャンタ、エローラに代表される仏教のおもかげはグライ・ラマに率いられるチベット仏教に置きかえられました。事実、アジャンタ、エローラの石窟はもはや宗教的価値というよりも文化遺産としての観光資源で名が知



エローラ石窟 カイラサ寺院

られております。

この様な文化遺産を持つインドは二つの顔を持っています。簡単に言って、都会と農村の大きな較差です。

二十五年前に初めてデリー、タジマハールそれに北西部のプンジャブ州を旅した時は雑踏と貧困のすごさにカルチャーショックを受けました。しかし、今回は、心の準備もあったのであまり驚きませんでした。それよりも、様々な変化が目につきました。

一九九一年に始まったインドの経済の自由化は、経済発展途上国の一員として年5%以上記録してきました。国内資本の民有化、外国資本の導入、それに貿易の自由化は高度成長をもたらし、貧困を減らし雇用率を高め、輸出の拡大にもつながりました。同時にインフレも抑制したので、インドの近代化と産業化を躍進させました。インド南部の都市バンガローは、インド

のシルコンバレーとも言われるほど、ハイテクの最先端の象徴として発展してきました。都会の若者達は西洋のファッションや娯樂を取り入れ、都市の豊かな層は電気製品、カメラ、スクーター等を購入しております。少数ですが、自家用車を手に入れる人達も出てきています。しかし、低所得者の間では腕時計やトランジスタラジオがせいぜいです。

インドの人口の七〇%以上は、農村に住んでおり、都市との較差は大きく、インドの二つの顔をあらわしております。

農村では、所得も低く、識字率が低く交通・通信網等のインフラが、まだまだ整っておりません。例えば、電気が来ていても自宅に引けない村民も多いです。『緑の革命』と言われた農業改革・生産向上もごく限られた地域にとどまり、日常の物質文明の恩恵に預っておりません。更に人口過剰のため、機械の導入は問題を生む事

があります。家事使用人を使うので、洗濯機や掃除機は、あまり普及しておらず、お手伝いさんを使う家庭では主婦の時間節約は問題になりません。逆に、家事使用人の職を奪う事にもなるので、生活の機械化は、社会的な抵抗もあります。

インド人は高度の長い歴史を持つ自国文化に誇りを持ち、ヒンズー教を中心とした信仰心も強い反面、閉鎖的で、後進的な面もあります。

日本や他のアジア諸国に比べると、イギリスの植民地下にあったにもかかわらず、西洋文化に強く抵抗している面も多くあります。インドの社会は、宗教、人種、そして特にカースト制により細分化され複雑な問題を抱えています。



曼殊室利
文殊菩薩
三惠
畫